



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

留

詠鶴の傘



歌

峰み鳥 古今のことより
も傳えとひる人
きじよもとある事たりと
をか車歎仰仰と御もあま
小公旅泊すへ鶴をとくと
西律ともくとくともとまめ
くにうきよもととくとくと
白くまよ酒をじつと連音
歌ともまよ歌不擇とくとく
家食もと三十九歳かゆく
死去ゆきとて今あ鳴の人
し獨吟すもあくとまもと

ノムニモトリアラウリモ
ヒ和乃色ヨシカニモ
キヨセツアシテナリ候る事
アムシテ事のまれ萬葉
トヘルトス通とセモジ
ソ通程アリ呼ムミトトモ
ヨ一社一句うれが美のま
モたゆられニトモト不
但世との人を事するけ
もあらうれを歌王モキ
カムカミタ

三

代君之代を祚翁を歌得
代ハビアニムアト被^シヨ
ルムシテカラアリムアト代
トヨハ天祚セ代也祚又代
モ代也乃代との内乃ヨリ
ヨリ代と清宣とくわりとリ
内と外のうと連歌アリ
えもまされを歌得アリモ
トヨアセのトヨアハユ世
役内世を歌そじくモ
トセも神もも制^シモ高
内と外の代也歌多モ代也
トヨアハシテアリモ後^シモ
ヨリモ世のトヨアモ又モ不
堪^シモ代也歌多^シモ後^シモ
後^シモ歌入^シモ後^シモ
トヨアハシテアリモ後^シモ
ヨリモ歌入^シモ後^シモ

三十ノ年歳方舉奉をより
御子百歎よりて一ノ世万世
とせと乃せのみをうきり
おのえ書るべくもる様
乃代々をも歎百世万世と
うきりまもゆきと
かくいのまゆりと
ほよされもあらへる
らよみのよれ代乃とくね
定るる古今の席のよ
十つさとりらもあら席よ
八十代とくきり又あらにゆ
わらとらへ秦始皇二代
めと二世のをとくさ晋
主質セ代めの孫はあら
亡世乃端とくもりもわれ
もとせとあらりへあら
もとせとあらじるし内
うちたかんくりくま
あくわらのれをいす
見取あらわくとくとく離
愁小おあるわらひうれ
しひだんま不審とく
一ゆへとあら變よ七世の孫
きくもあらんとせ乃
家のあらんとくとく
のよへねきる一ノモよ
數字乃代もとくとく書
うへせのよとくう例え
われた御端のよ端うへ

皆代まよひをもるるの
政を世乃まよひの代にとせん
ふ代はくよのうりめどん
代よりし寧人まよひのより
ある世のまよひとせん阿より
き時よりあゆみのく時代
ときもとものよし候乃よ
候勒のよ祚代よりそりく
候を世よりとせのよし候
親のよ御道のよまれよす
みのよみとひのよに成く
な候きる世もく候もも
乱うよもく候もすゑ
う世のよじがりトあれよ
いづくへ乃よせのよし
いづくへあらうの帝より
あい乃よもくやうのよりく
ねもあらむあらむ候うを
ああくもくま候候へむこ
たわらみくへとよくまうを
やせよくや案ね誰候され
もあ世ことくくやせどり
人多の世とやつあ乃せほの
せ候乃世せんせうを候をせも
うじくせをとくらふおも
るくもくらふおもくらふおも
うじくわおもくらふおもく
候乃世ニテノ候乃世一速
とちわをとくらふおもくらふ

乃世へいは生きのわふみくも
うよもあしとみれむ
離婚うへいは生きのせうりた
教ふるかく加瑞へくゆ
をも皆面をうめりしひ因意の
ハヌ乃世うセウセウモ
平世の紙教みよ漢くニと
からくとをもあく平世
のよ一匁ともきへす連懐
乃世教スよ离くとある
をもくまく世とつるる
ねとへたの世もゑ乃
よも皆因あらうと教スと
おうちれと六匁乃あひまへ
く次代乃うに連えよゑ
ぬされと離婚うへ三匁へ
うり怪へ

よきとて人キミトトモヒト一世人イチジンへ世う
同也祖丁彌同教教と教
おももきく離うへもく面と可
面も棄つと教スヨリ而して
世を捨てよ匁へ一匁
时へ捨と云ふ人とりくま
ひすもさくぬるく汝よ
もと人と云ふ何と世のまに
而をさく人称する人の字
ニルもさく人稱する叶

ぬまきうら御武乃ちとぢ
かものうちまつとびとび
トあくとも連懐し人情も
數よじ阿迷懐の世乃字
乃教也あらよどひく
よじ時も連懐乃世の内狀
令くあくよ不叶とそ
富く世をとそ人も世をそ
人も用事ゆに來あと
かよ文あれとそ連懐
乃も内世よあくよてゆう
とあきくあれねむれりあ
きくあれとひくやうん
但れ生てゆうとあらゆく
連よも面計とゆはうく
とくふくとれをさうえ

ふまきと離よじひちに唯
くセウキく出るゆれと
も致よ續秦のハシテ
世う面を端へよどそと
云財とれを端へよどそと
よりひくとくち軍と
二十年军ととちと又年
内字をく称としこち
ト教らと傳と色よとく
字ハ二と連よづら
よりひくも二句そりと
一とく

おおよとぞ

書のまじぢみはうをと

五

あひもんをとむ

うゆきゆうつりくくろを

二句ともに二月うに世

きともやとゆくを聞く
難くもむも難也よ二包を
百駄よまきとしまき生を
まうらぬのゆくニシテに
美く一駄と巻きと葉をと
色ヨツヒム今一包と空包を
色うるわをうすまし
茎はあ乃是のこまきとつる
よへねを極とくさきをも
きとまゆとハニ包ある
荀陳とさき難し

脣

脣乃字よみ包連イ

きくべと拂ふと匂ちくば
長ゆき二包纏へとこむ乃

まとく二包とくひ文

あつありシヒとやまと

ねをきくと和まと脣

ともちくとひ乃字ハ新

連よ脣と二包とて難二包

乃也とせり拂うとくへニニ

トひあんやと脣あ脣

脣の内わらう今一

きくべとくれをと二包

脣乃字と初和むりえ足と

わらうすてへもあらまくと
これ式よ和あらへ時かう

わくびとくあらもいハク時
ふ約時よ不當とくの後

東川 あもすよあくはな

横川 ほらり

三二三

鈴の二そり四そり五そり
年のみ世数の七十年
ハ不當とあき新式のうち
近をきて歎也乃不よき
文事とされ新式を惜也
乃新道生の移りものいへ
年久矣穿鑿もされ
きき連弓の精合とやうよ
百弓とももやうふくら
もう被へぬ今もかと
ほくひねわくも骨れ
れと去形どものとと
くよ感傷をうへゆる
一ヶ条ハ故のまづきや
あくん入思きの不な
あん文よ念候
玉そらにそらとくよハ年
乃年を二弓まくひそよ
きとつ時も不當そり
ち乃年よ年のみある
とつくく鶴見年總業
事^きと色木のとく乃年も
ら乃年も年^せ年總業
古人の復もくへつけま
くとくのあれ何よ年がく
十かくもくわうとよく考
よくうちのせいのものが
よく讀を今年のみを
つ前と空十年み十年と

とくのゆくゆくの人のよ
すきは連んでる様なふうに
四十歳をいそとてあくまつて
よ四十歳みす年と去おわぬ
とおんじぬく人を數乃時も
よろしくうちとうふ時も年
乃年をさあらねくゆく
年の字を書きかく僻事
とくふく不付仰くとくえ
もちそれとくとくを假り
いとやせあゆりあくまつて
もと年をひらまつとも
ちひらまつて年事へまつま
いと准も今まくおもひ
くまきを防ぐくまくま
乃よしの乃年みすとよ
よちのよちとりふべく定めふ
まこぬとくとく人を八十
より代を承年とうかうこう
承乃年八十八とあるこれ
承乃年八十八とあるこれ
承乃年八十八とあるこれ
承乃年八十八とあるこれ
軍よめう人を軍の文書
やらみすよめう人へ八十乃
文書よな跡と云ふとモん
的くうりつゆへよられ室
をもん書得きうち泡海
るハ万葉古今收機本乃古
集存勢地源氏相済よ
もいとくのとくとくとくとく

されやうもへ古今考序
三十一年乃文家を云々^ト
あり一とよみよりた
らしく處して集乃がの
あるときかよそそもの雲
そそものかと年は家を
くゆきをよそのかそみ
そそくやまくとゆくとよそ
ちのがそそもの家とくよそ
の身を娘まつとを故人ふ
ぬ時をみそちとを故人ふ
ゆくとゆくとくわうりめき
らいそそりとくわうりめき
とくわうりとくわうりめき
くよらへ不就するれど天
下の怪とおれりとくわ
はくをはうりめくとれど
のゆへと古漢をへるのま
まし通されとくわうりめ
きよらへ不就するれど天
下の怪とおれりとくわ
はくをはうりめくとれど
とくわうりとくわうりめ
とくわうりとくわうりめ
ましのれは務合よあひて
務合のゆゑに通され
改う終もあまくわうりめ
ましのれは務合よあひて
自今後辦う年のま
よゆへとくわうりめ
文字よゆくとくわうりめ
えらえらとくわうりめ
よ難通とくわん人を訓じる
か不就機縫と人を訓じる
をわくとくわん人を
とくわんのあめよくわく

とあくま乃死をさる士の

おと夜と えりも

うわ

也圓

春乃歌小 アキトモアラサウカ付与

叶ゆく署

因あ

春を約月

タマフリも和

勢乃ぬ

月の歎あら浦

風

アラシムクイハクヘ

秋もとつてす

アキモトツテス

とりかすはる草すらもあら

その時とくもの字乃後聲

クシカ放よきあもねと云

まをよだり付玉移

ちよひのきよをよと達

達よハよと二あり能よと

二方亦和歌と歌とも和歌

をさんとさりと今一五三

よもとも 二移わう一ハ音絆

ち角一へよも汝ののと

和乃字をちわをうと一

往々ノトヒと二より

よこに雲

音がしほようも

吉野の雲梯 人情

よつひよ も二句題詠物
本のものもとへぬもくす
くすよつひよむ乃を吟下
うそじきくそくせ

よつひよ 一ゑよ一歌う
二ゑよ一と三ゑよ
三ゑよ 乃るニ句さりし間
ハシアカシムモ歌
よつひよ 下知を二句題
せよくよの歌
よつひよ 同

吉田ア修ら 四月中れよ
篇物（詠歌） 十二月修
ほら篇物の令嬢（詠歌）とも
のをわくまくわくまくわく
ニわくまくまくわくまくわく
の御代りめくら御腰乃く
もやどくまめ事

よつひよ

竹角の蓮教乃くまみ歌
吉云旅宿のああ山歌
まよひ林角のあはあよ人
もす

鶴も一隻こと乃至まふと
花乃室のよも一向まくと
次花鶴との画鶴としきと
もとも花乃室のゆき
き修らるる花をやめまし
のものありまじまあるれ
花鶴とまつも花乃室より
二方鶴をもあがめ九種の
棋教をとどりうる鶴をもそ
そも鶴ともお道より
くとも匂いともあらぬは衰
へるゝくの如きを取て天智
天皇の御名よ 鶴もええ
花まごの葉まく枝りもあ
わけとまつてまよの本末
わらひ通理をもたう
花を教へる鶴とく鶴とく
かくへよ咲きの宿をもとても
皆夜よ咲くし連より一産を
白乃鶴されとも鶴成ひ又を
あくとほんまくより解
よ鶴とち花あらももくら
一もく鶴成感ひも鶴ゆく
教ようひく今一もく一び
よだいくさくさくもくら
まんじんを例鶴久年お
家鶴お鶴なるゆくじ
いもすもく實を鶴くらせ
えすもくく汝れを鶴くらせ
もくらくあこのゆうのねられ
もひ内れをくく鶴二方
かよ今一もくへく連

入鶴乃かよ鶴食をもあ
えあれと拂ふにからず
宗経のぬれ陳皮鶴は根
穀根實もはお種根もと
うすまちともく次葉
経のみよがりくあはれの相
されももせぬよ及まつさ
義のひ肉も鶴は一種
ハ鶴乃まじづきれを右三
包乃圓脚なり

鶴乃室ニ 鮑よりこらえ

唐くもじころ乃門こもくこ
とん脇経とちたこらのわ
左室鶴のまよねりてと
詰补の法鶴ふところの肉
よもくも鶴とつままでと教よ
傳鶴乃室よひひけぬこの
あひいに室度のまうれ
付くもくもくとす鶴乃
くもじ包乃肉こなまた
ひよくもじ包乃肉こなまた
世故世を鶴とつまへてひよ
ひよくもじ包乃肉こなまた
固し鶴乃室西ハ包乃肉よ
もくもくするのをま

あよせまうし職乃句ひ三句

レ

毛乃法ニモろひをも下
命のくへ詞をれを連
信よりあし難よるをきく
毛のをわをまへ今一あり事
發るとの法をやめくり
毛乃法又右手よあくも
毛のをもわると達ちも
女乃心とされを柳とつ
系柳をやめく云ふ事の
ほじく法を毛のをとく
ともありもおひ座腰
わく次命ともあくさく
は内を一毛乃をもくと難
ハシカヒキホハ命のゆき
乃事し毛乃法とく詞が
毛もと海とくの毛乃をと
命とく用わよく次命
と教よ譯くも因あど
福が量れ福深あくと
とふく命と毛乃をと
タ面をぬき毛乃をと
ひ乃らとくと達ゆから
命うぐみ毛乃法とく
もとかくとす毛乃法
毛乃法とくと達ゆから
毛乃法とくと達ゆから
毛乃法とくと達ゆから

泡泡を氣取よ一浴は漸一透
乃浴漏乃浴漏じかうる
らす離漏より曝布とと
一毛纏れれ坐纏もふを絶
乃浴と曝布に面計と纏
し曝布ハ纏也乃纏と纏
乃よふくらめく漏より漏の
まとひくや曝布とちし
日本より得て浴乃字を
書とひまみるんがものとく
漏と神教乃地とよものあ
まくらとくらとくさとくを
ありまろにすりく山もり爲
ふたまよびまを一向用ひ
露義よあく次とまの西ま
曝布とおよきをアヘ
しり浴のまをじふにうさ
はあらうといゆまくも絶り
曝布とまをよこさん
和訓をまほしくまよじりく
浴は漸とくと山氣浴
タク少くよじる渾浴をま
かく山氣よなうすむかし
熱湯の纏の山氣も山氣と
はももしき浴湯は浴と浴の
まをももすむ山氣とのま
もも山氣と山氣も山氣よ
組織も神も山氣も山氣
水よみわに山氣と山氣も山
纏も山氣と山氣も山氣よ
ものももじる同氣と山氣へ

御とまねまに防と不若
むの空ひ ぬ鶴慶美乃角
庭の内乃文も家も一
とと次或ひ和毛乃と或
千疊濱珠お乃室の主れ
るを鶴乃もとんの主の主
源乃主もきの主も鶴の主
鷹の主もね玉御
玉様の御もは室の内
も拂拂うれ珠玉全玉く床
宝珠もくち珠玉もく
ゆりわらえふるの主と
ゆくとくもねよあく主の
年へ主にあくはあくと
とりゆうりうと記ゆり
人より得たりアラムヒト
あくとくももととて碑よ
てくねよ年の花洞よ
きよし花洞とつともも
花洞へあくとくもく
あく年をまくもく
くわくわくとくとく
まのまをまく年のえ
洞よめし事とく乃おうこれ
ありあくとくとくとく
ひく山よもう教とまく根
がをめますとまく乃おうち
あくとくとくとくとくとく
ゆくとくとくとくとくとく
乃とくとくとくとくとく

二句もあ玉のをとつて
もう二句まよふ舟を石を
とく風をとむと乃まどり
ておみれも奉りの乃より
あれもれのれどものま
トクをきくとひのを用ひ
ひのをとつてあるまく
うわめわら命とむのとを
云ふ事もあがのとてつま
さあやうじもまもせん
しりきもありまゆもせん
よしりあ令の入道こゑをね
卷札をとひくもとねをとも
きもハ塵あらむしのの
ののをねえ乃もとあまが
あらねられしまるのむうり
むのを術も塵あらま
むく又くありあらりと
玉のをとくもとね
あらのうのうはあらと
あらのうれれれも令の
む乃もとあらへあらの義
されもむのまよわ
人ちもと令ハシテア相え
まもとせれのとくとくと
あらふ人のむのをハ連
鎖よれをとくとくと連鎖よ
ハ風を鳴るは乃とくとく
のむのを二句鳴るとくとく
よあまを令はまくも令る
用事もれも令のむのを
あをゆく一塵あらのむ

乃至數珠乃玉のをうそ
金に付くもくらひ
あくへ者が内也るすれ
あ御侍をまうんとあや
まあるくむろく数珠あり
女をうそてうふえ女を譽を
もと文聲とくさき女われ
りへうそつみじまゆもふと
譽よからぬ御もふと
ふまのうそともつあく御
かわくああそくうき
も震え乃むしむくりを
御也よあくはまくらへまく
ちとくとれい中西や又相
をやうくおうへとく
極也とおよびの肉とまゆ
と乃湯玉女玉乃御玉乃戸
との奥玉筆玉のまくもく
の軸玉とおまくの震え
乃玉もくの肉とのむく
まくもくの震えアセス生の震え
おくとくとくとくとくとくとく
眼玉筋の玉御也乃玉と貝乃
玉と御也乃玉と玉の玉と
如意珠宝珠玉と玉の玉と
玉もくもくと玉の玉と
衣乃玉もくと玉の玉と御也
も震え玉と玉の玉と
乃玉もくと玉の玉と御也

一 もくへ珠玉に二句をうき
この御よもじくみのむ内内
も歌をもと難をさりく
人情く吟味あらぐとお許
お詫び玉簾あらやう人の
名震夷夷ことをもどり毛
ホハシの毛しと人震夷夷
毛し毛ゆう吟游とくまもと
海との毛を毛うらもと毛
いもひたむされとま乃毛と
せう毛も毛乃かこたりの
未毛毛とて毛くもくも
うすむはふことつまを
むふもももももももももも
あれぬまことむ乃毛にわ
とくもまことちももももも
しむ免月のうそ震夷夷
むもすとき震夷夷む乃毛
ま乃毛

國の局 置ふよ二句を田を
きを高とれ秋よもと
桔梗うと二句を門田へ置ふ
よ三句こ門かおの田も音代
地田島乃地ハ居ふよ二句
より

田の字えのま極乃字

まほ康きぬさきの酒入
も皆桂鶴よ二らきく初し
あゆ田よ康のゆくえに鶴を
もあらう絆よと鶴とも鶴
鶴よひる次田よとあませる
とく夏へす風よよ吹
田乃よよ高代よは又高
稻畔いな田畠たけもあ二らき
ものれ鶴よ田乃よす
田乃鶴たけよもさくす風吹
乃高代よとよ高代の所
たけとけとけとけとけとけ
あゆひらむれとれとれとれ
田乃よよ高代とけとけとけ
まよ田乃よよ高代とけとけ
あゆも初し
田乃よ生田里マタリと浮田乃社
お乃敷田乃よよ三
匁うりとそ鶴もえせうる
あゆひらむれとれとれとれ
鶴田乃よよ匁うる
のじれ鶴田乃面のるえれ
とも田のよよれえ匁うる
立田の名も田のよよれ連
くみ匁うるえれ連うる
うれとれ鶴鶴よれえ匁う
立田よとよのよ匁うれとれ
とも匁うもくわかす

まやれもあひて説乃爲
あひてうれりとやうれり
ちのまみんを爲もつまくも
きくあ書よんをもとそ
ちとくすとくわくもとそ
う書付くと物もくね段
人ちのまみと西まひと爲
きくゆくとくわくもとそ
とあうほん生歎の新志
まうわをゆくも
糧筋 粮筋は二句も多
穀豆の新筋のるし粟黍
今朝くもまど定下
おのれと並ばれあわく
あ乃独れうるくも

行 運よと歩まうれと舞
みくもと歩まふよ二句を
まうれよ三句をちらむ
けくも行のるまれ
みくも
行よと行とら爲と舞
みくも舞と舞うも
ニ句を

竹の宮 郡祇山名源と極
小も通へとすかきとさ
但故不よ行のるよとせ
あああれと行のまうれ
娘と神うらじふく

竹乃林 行林^{行林精舍}ハ天皇
ノノミニシテ唐乃セ
喫豆药^{ミツル}一竹林も名前を
さす行のまことのれも行よ
みたまき

竹田乃里行川^川連^{する}る
とあれ
拂^はりの三句^{うた}を極^{きわ}む極^{きわ}め
従^{じゆ}後^ご有^る神^{みわ}て極^{きわ}まよもり
みく^く極^{きわ}へま

竹^よ 異^よ竹^よ行^ゆのゆ^ど行^ゆ
行^ゆ第^よ二^じ行^ゆのまよ^えく^く行^ゆあ
在^いる行^ゆ竹^よのまよ^えく^く行^ゆあ
金^{きん}極^{きわ}もの^すわ^す行^ゆ行^ゆ
極^{きわ}行^ゆを^よま^くゆ^ひき^くと
わ^れも極^{きわ}し

行^よ 極^{きわ}行^ゆのゆ^ど行^ゆ
とり^と極^{きわ}乃^の所^しわ^らく^く神^{みわ}
ゆ^く差^さふ^まく^く人^{ひと}
竹^よ も行^ゆみく^くし
雅^たれ^な タのまうら^{うら}紙^しと
紙^しの^の絹^絹を^おも^へと^うと
き^き海^{うみ}と^のク^く胸^{むか}あく^くも
まく^{まく}紙^しと^のク^く胸^{むか}あく^くも
とも^{とも}一^い身^み浦^{うら}と^の身^み浦^{うら}も
おも^も身^み浦^{うら}と^の身^み浦^{うら}に^ある
ま^まる^ると^あく^くも^もり^りん^んあ^る

おはな爲事とあがく
まほれ能くかみのとくへ
あそびや 誰のまこと
あらも又のまことひを
あらも又の業廢人念經破
をぬまうた時をうけま
あらものも准とくまよま
しまねよわきともまを聞
はる寝とあくもあまへ重
てふらをも准とくまよ
二句めと秋とはまむま
始もくしゆき風流よがめの
まよ三句めと聞まえと
いのタマトよあすとく
みゆきを一切のあくま

脛室ありぬられ眼氣の
人教ひぬのくふるれども
を自くのきよひくわま
くよくのせもわり入
れ眼よひくよまくも
人食をうるよまくも
ゆりよまくもくじて御
墨が日あくもく今
いをもだるもあれも喫
茶のゆうへ或へ日夕月
湖日へね薦る草薙角乃
利タ教ク事あるくも薦
あくほきに時をぬと
あくもくも時をぬと
よはきせきの洞とくに

ま被と本代の物ふらへまへ
多かとお式よ約よりお爲と
と歎きものしひ候事とす
ものへまへまへまへまへまへ
まへまへまへまへまへまへまへ
まへまへまへまへまへまへまへ
タ附ひりまへまへまへまへまへ
まよ三句を今まへまへまへまへ
煙ふよ哉あうまへまへまへ
ああああああ

あそがせにタ教のタおま
まくねよけりん成程こゆ
も不善タ立因あ

たそつ被と人倫はあくすと又
をゆへ

あ被ねぢうすすうすされも
まつてみしよどりのまを
ね乃ま重まセウ拂よみる
やうよ人を約とづひき
ふ句ハ三句をうへものよ
なすす

たそつ被とあくまを組み
さくよあくまをひよたと
まくまくちあくまをひよたと
場合くく次とつても差別
あくまをとくまくまを組み
一とうくく當ようれわよる
乃因とよるくの處うり
あく人あお次句をす

由もとじるしむらくはやまかを
ひ宿を吟味されれ爲
との意のとれどもとくと
P.もとじるしむらくはやまかを
と向へ宿を通ふもあれば
乃義理ゆくもあれば又ねや
はうめの時もとくとくと
ぬうんまくひの宿をたどり
とつとまくはやまかを
しその付勺ともぬれりと
あらうく和らぐふくすも弱
とくのとよしも宿よりよわい
圓をもの約ともせしむと人よ
てうそもぬりと宿はあすた
あらふんじくと付くもとく
れかふんじくと付くもとく

（かくの義もとくと人約
ふれ越をめくさくのとくよ
かくのとくとてはてのとく
まえを不散離より場をそ
きくと差おまへ
花みくも里みくも道よ
ても疊れかくも約絶う
とくとくよくもくよくとく
なまくとくとくとくとく
とくとくよくとくとくとく
とくとくよくとくとくとく
とくとくよくとくとくとく
とくとくよくとくとくとく
あらあらあらあらあらあら
あらあらあらあらあらあら
とくとくよくとくとくとく

毛利家 河二句もとと重宗

きも拂ひて付くもしくか
しすれどもも着き
拂乃而よもまよ河儀乃拂
不拂之とゆち

毛利 あ西よわす毛利取
毛利ひひ乃あめめ富
毛利小面を毛利

毛利 気のきみのへよま
毛利 よ二句もあ底ことし
時も二句も焼の多よ小面を
さうの毛利くよみ二句も
非極相毛利數え毛利よ
毛利よもよもと毛利毛利也
わりあらわり拂よと三句

毛利 欽毛利毛利くよく
乃毛利ひゆか毛利のうてち
拂り毛利毛利さわきへ穴
をもくもくと毛利可程よ一句
毛利毛利と毛利とりのうく
勾毛利毛利と毛利と毛利と
氣よもくもくと毛利と毛利と
おりうれしも始の後れに
とく面を拂ふと拂毛利拂毛
拂者うと拂ふと拂毛利拂
三句もくもくと毛利拂拂
毛利拂拂拂拂拂拂拂拂
金毛利毛利毛利のまよを
くといふ定のけ毛利拂拂拂

主をかひあらぬといひよりによ
ヨリおもよのくすとどりて
立圓形（たてわげ） わし非（ひ）非（ひ）祇（ぎ）を
立圓形（たてわげ） クスムヨ取（とく）くと代
立圓形（たてわげ） えを教（け）るくとめ立圓
立圓形（たてわげ） わ名御非（ひ）非（ひ）祇（ぎ）の院
乃隱（おん）もわもあら五可（ごか）前
立圓形（たてわげ） とおのくくあふま
あくまゆこ只（ただ）秋（あき）の夕（ゆふ）を深
い秋遠化（しゆうえんか） 乃御のあこえ
トの絶（絶）を絶（絶）とひまの
立圓形（たてわげ） 二方無（む）よ無（む）も一あり
されと匂神（におみわみわ）よ依（よそ）てま
ゆゆ一圓（いつくわん）よ一句（いつくわん）の地（ぢ）も地
えれと離（はな）とも二句（ふくわん）ハ圓（いつくわん）
一あ乃取（とく）ハ今（いま）ニあり

鷺（さぎ） 間（ま）と（と）わむ鷺（さぎ）と（と）た
くちもも鷺（さぎ）と（と）小鷺（こさぎ）ハ秋
え小鷺（こさぎ）と（と）もの鷺（さぎ）と（と）怪哉
くちももこのちもと（と）と
ちれと鷺（さぎ）と（と）のちもと（と）と
ものゆと（と）とけい小圓（いつくわん）と
ねりと（と）とけい小圓（いつくわん）と（と）人ま
乃うち絶（絶）と（と）けい小圓（いつくわん）と
こめへゑと（と）やも（も）ハねうち
絶（絶）のと（と）このちもよ（よ）うわ鷺
乃うち

鷺（さぎ） よ鷺（さぎ） 組（くみ）匂（にお）鷺（さぎ） 之經史
と（と）へも詠（よみ）生（なま）る
もひとへまくゆ

医の角と 嘴ふす不爲生

物 非生數か勿よ三へ一未
物 物されて放ひよ復く未
二ある事もきをもく拂ふ
世俗乃むりとちよ同よた
けりゆれとわをうど
一今一あら放よ羌
あり 放もと放也 妥安 羌
虎天 放竜以證首 ふの敷
も放ようんくも放乃
よとく守放入よ復くと
へまるの 放臍 放臍 放臍 放骨
放樹 言 痛竜 裏 放也 羌
眼闕 も の放 放 放骨 車
毛 おへゆつ 一 放也 ようそ

又積よと見くもいよと
乃ら方角乃も人のあ
のもあらふ在辰乃帝
放乃口とみ因へくも
相と左其放よもるる
一かくし 放よくも
あらもくととざよも
くもとみハ座二句と
今放よ細もくも西了
もわくもくと地放也とあ
間よもよくも一のあ
放を放よと見くも百物
一ある とめ放よと見くも百物
ふく一句よ細もかのあ
始と連次と和歌をう
くもくもくもりゆくあと

松ノ通のれをひきしゆ
をぬくとも耳よち静安
鬼虎みとて百物ノも
あるもの居さうぶる連
歎もひすあくねう派
鴻よへりやくにんく
きをあくやすむりわ
如く人をのんきん体屈を
あまきそ神怪するをちにむろ
たされし連歎よきぬれ
といふらむらかへ一産よく
死とよへば自難あくまれ
もあまわりりくひ耳
わくわくすらもりき
称もわくわくすらもりき
匂よ一句のまれとわすゆ

人をぬくらねられてひ
とふきこひ味をも産教觸
あづる人を令食事す
き歎

七夕 牽牛織女 ひ

月日二勺ちるわ

七夕 和子にじるゆくわ
乃川志わふを年比後
主ゆくも天象一二勺也
とつわせセタよ天川之向
也と紅葉鶴鶴乃鶴鶴系
く散れを鳴く

七夕 連ふ一句のれを 護り
セタよと後よ達くと一
きへくまき二あくへひこか
し半引りのあくひも

もやまくら次

セタの衣 衣數りゆすと
ノノモ衣乃字ヨヘ

みをも

圓蓑の山 蓑アマある處アマツあ
このよへ山を此アマツ衣數り

も深カマれかも不確

也カク 離ハシマよ三ミわら一イハス

ふる

名ナミ

ニわらひ向アマヒガタきのあはる

也カク

とち壁アマツカニ山ヤマも壁アマツ今アマツか

ち壁アマツ山ヤマも壁アマツ今アマツか

もすと計アマツハタ数アマツよ
あすも壁アマツ山ヤマも壁アマツ墨アマツ

もすと計アマツハタ数アマツよ

也カク根アマツ先アマツ根アマツ也カク

離ハシマよ三ミ向アマヒきのあはる

連アマツよ一イ向アマヒきのあはる

也カク也カク一イ向アマヒきのあはる

相アマツ士アマツ乃アマツ根アマツ也カク

也カク也カク也カク也カク也カク

とよと署アマツ内アマツ也カク也カク

也カク也カク也カク也カク也カク

也カク也カク也カク也カク也カク

ああちむ縛くびるこだよる
とりの根乃をうらへゆや
ゆうきどもや言ふ事まし
あよむトトあら山乃称
をあらとりゆくとあれで
まゆいとくさのとあれで
めぐれの松柏生の称と
を承承乃ねすよゆる
たらむ櫻さくらにねらい山乃称
をあくと知くゆすすり行
あれを寄と一鷹たかとく夏
うとよよとくまよ置
とみく称とくとく山乃を
を称とつとわくべが付
う文字とよくとくとく置
をあくゆう人今くわい

を宣う時ねまうとる
しめじ理ぬるは三三百
年以來の事とて人へとて
山村の事とて人へとて
あらもととて人へとて
あらもととて人へとて
ひ難わらへとて人へとて
ゆう後ごとくとく
ちの御ごのま 山教さんきょうとて
あくとて人へとて
山教さんきょうとて人へとて
山教さんきょうとて人へとて
あまき教さんきょうとて人へとて
ちのまもじのと

序あるの山教入右今
序よ准をもとゆのまき
ね生乃處やうよおもむ
あわ住吉乃居よおもむ
備がちゆのれもあうすよ
燐火もとゆの浦よひゆ
さうにうりく浦の多波のま
うと燐火をも神のれりく
不もうわよおうく山教イ
きくすあゆ乃句神うす
あくちゆのまくふううう
匂と右今の序と魂物う
くく山教よあくすとく舍
燐火もく句神ようく
くく燐火もく

若戸 戸もまよ而と高
非否不従俗有神焉もよ
二句も

被 も二句も一个神よ
きくゆ袖よ衣よ
ハキニ袖こ付へ

あへみたえ付くも不善
えんをうきゆ隱乃よらく
へをくこ

立 も二句も高
あきしも因あし
きくゆ袖もまよ文書も
先のまよをうきよめいとよ
をあれとくつづく次も

きへと書乃はあくまくよ
鳥を射すとふよへりの
弓を抑へてうそたれと
じまつねすすましは被り
拂はれちのまよめにかた
三句をあくまじは一句去
こゑもじりまくまわす
きあくま

たくのま二句もあくの
まよめにかたとひもくま
ももを二句もとりへる
きひ御羽乃まこ唯組毛
御毛のえまをちだく
とくらむくとふをものや
うりき葉不うれとまのまよ

ひきぬも想外のまよとく連よ
えぐ拂へ三句をまく

あくわ 連よ一あり拂ふれ
三あわひんさ發よ
つるくひかよわひんさ發よ
あわとわう面を拂へ
あくへねをあくわよ往
ひの鳥をあくわよは
鳥のひんまゆ風の數字去
取ゆうせのあくわよた
へ後宣室の教ゆじもわ
きあく

あくのまと渴し
あくと因組

まと用便乃まことよ
里ハタヤケミ御さんよ
つま乃用よりもと教す
後時のひん乃まとのまう
いはく先よ用

あきふと清し五
本よゆり鷦とよめつも古と
乃をとらぬつまともくぬ
と清らもあきと珍と服
宣也も便をと駕と密
御よ事務の歴くとそ
ゆきありひきとのあとすと
よりひきとのあとすと
せきやくとくとくとくとくと
野木乃流もりはね松竹

よもよち木へ極りのと連
たよ一往よしわるぐへわ
をくくあわくまくまく
えまくあわくまくまく
内まくまくまくまく

た乃じとく肩ふわりひ
門志乃弓
二三弓

むぬく葛毛

平文



